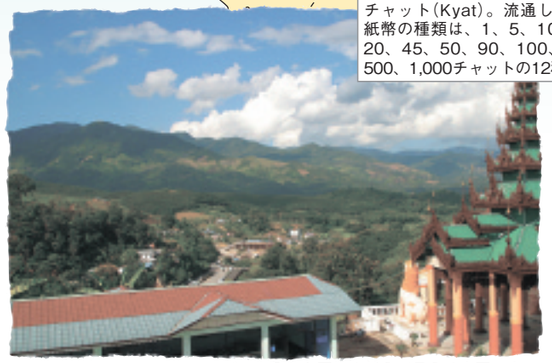
国境を往く

一枚の紙に秘められた力

国境を通過する通貨

通貨の価値は、各国の信頼の大きさそのものといえる。
国の力が強ければ、人々は安心してその紙幣を手にする。
しかし国の力が弱ければ、紙幣はただの紙切れともなりうる。
それがもっとも顕著にあらわれるのが国境だ。
物や人とともに、紙幣も国境を越えて隣国に染み出る。
隣国に出ても価値を保ち続ける通貨もあり、
隣国では紙くずとなってしまう通貨もある。
そのとき、一枚の紙の背後に潜む「力」の存在を知ることになる。

▲ラオスから中国へ。ラオス側最後のチェックポイント


▲ビルマ側から国境を越えて見える中国の山々

ラオスと中国の国境で

国境の向こうは、中国だった。

早朝、ラオス北部のウドムサイから、乗り合いバスで国境の出国審査場までやってきた。

バスを降り、ラオスを出るための審査を済ませてから、再び小さなトラックで5分ほど殺風景な道を走ると、目の前に中国が見えた。

問題はそこで起こった。トラックを降り、運転手に料金を払おうとしたとき、彼はラオスの通貨「キップ」か、中国の人民元、または米ドルで払うように言ってきたが、手元に細かいお金がなかったのだ。

ラオスキップはすでに出国審査場のそばでほぼすべて人民元に替えてしまったし、また、人民元、米ドルはともに大きな札しかない。運転手も、人民元や米ドルのお釣りなど持っていないため「おつりはラオスキップで払うからその米ドルをくれ」といってくるが、中国に入ってしまえばラオスキップなどはもう必要ない。国境を越えると同時に、それはただの紙切れとなってしまうのだ。

通貨の力は国の強さ

ほとんどの紙幣には、各国を代表する「顔」が描かれている。福沢諭吉、ワシントン、毛沢東、孫文、ガンディ……。茶、緑、赤などを基調としてそれぞれ鮮やかに繊細に表現された顔が真剣な眼差しで私たちに訴えかけていることは、「私を、すなわちこの国を、信頼してくれ」ということだ。なぜなら、金本位制が終焉した現代において、紙幣はつまるところただの紙でしかないからだ。それを何かと交換できると人が信じているから通貨となる。その信頼を勝ち得るために紙幣はそれぞれ荘厳な意匠をまとわされてきたといっても過言ではない。

通貨の力は、国の強さそのものである。国が信頼されるとその国が紙幣として印刷した紙切れにも人々は安心して価値を付与する。

そのような紙切れへの信頼具合、すなわちその国の強さがはっきりわかるのが、国境である。物や人が、絶え間なく行き来するその場所では、通貨もまた、境界の向こう側まで染み出していく。しかし国境の向こうまで信頼を保持しうるのは、強い通貨のみなのである。弱い通貨は、国境を越えた瞬間に本当にただの紙切れとなってしまうのだ。弱小通貨は、隣国の銀行に行ってもその国の通貨とは替えてくれない。

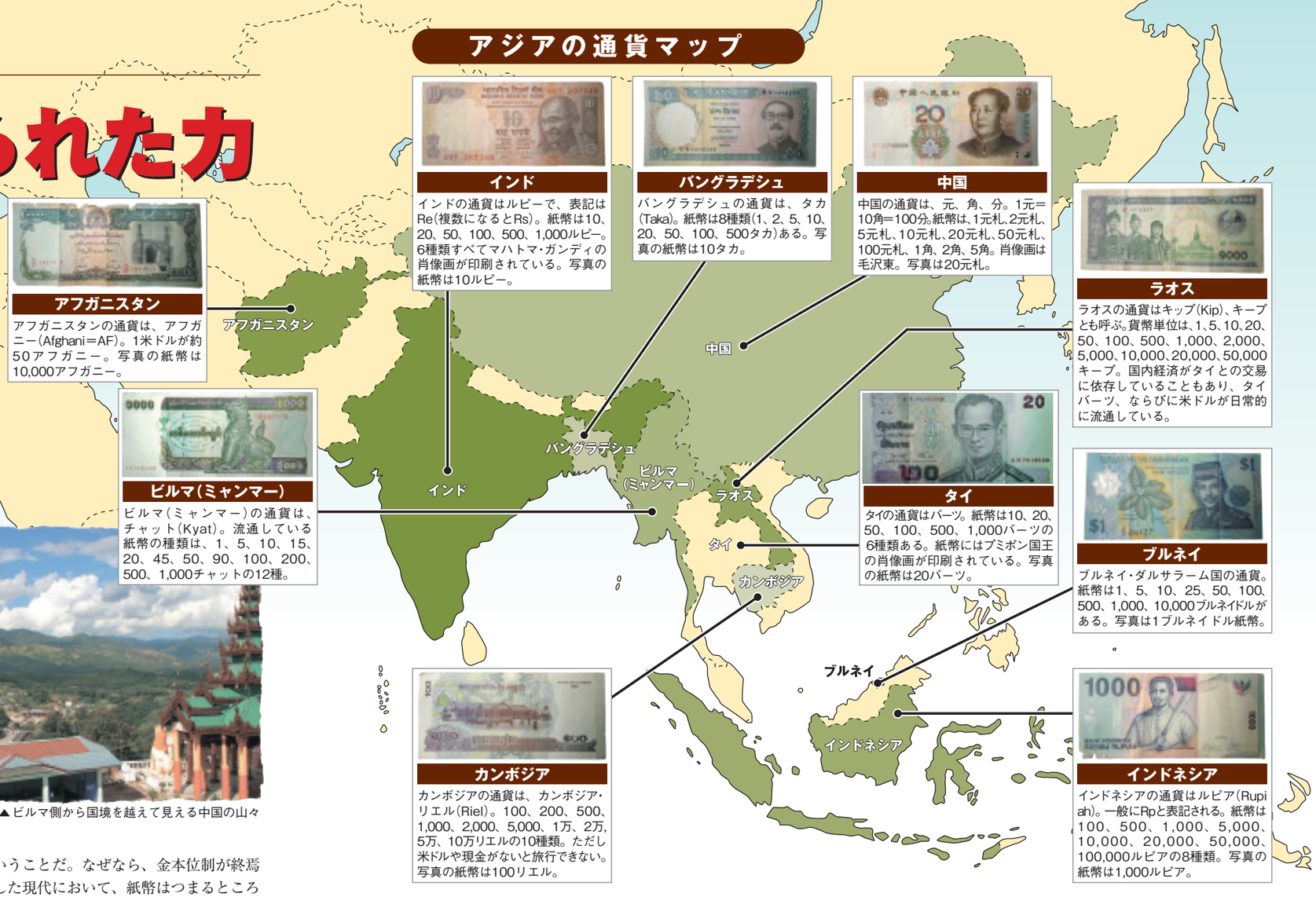
タイとビルマ(ミャンマー)、ラオスとタイ、ラオスと中国、ビルマと中国。それぞれに国境を持つが、ビルマの「チャット」とラオスの「キップ」を使う時はいつもその力の弱さを目の当たりにさせられる。なにしろ国境付近だと、国内ですらあまり好まれていないのだ。

その一方、中国の「人民元」とタイの「バーツ」は、ともに国境を越えても使われていた。いや、それどころか、たとえば中国と隣接するビルマ側の国境の町モンラーでは、ビルマ国内なのにも関わらずチャットは使われておらず、人民元のみしか価値を持たないのだった。それはモンラー近辺が、一応ビルマ国内とはいえ、ビルマ政府からの独立を求めていたワ族という少数民族の自治区だからであるが、そのことだけを見ても、彼らがビルマより中国の国力に信頼を置いていることがわかる。

自治区に入るためには、一人36人民元。そして、モンラーの食堂で麻婆豆腐と青椒肉絲を食べて、再び人民元を払った。まるで、人民元紙幣に描かれた毛沢東が、この地域さえも支配下に治めているかのようだ。中国の強大さは、中国に入らずともその周辺にいるだけで感じることができ、ビルマの不安定さはビルマ国内でも容易に伝わってくる。

モンラーの丘の上にある寺からは、国境の向こうの中国が見える。見えるのは遠くまで続く緑の山だけで、そこが中国だということをわからせるものは何もなかった。しかし、中国側から国境を越えてきた中国人旅行者たちのにぎやかさに包まれ、人民元を使って飲み物などを買っていると、国境など越えずとも、自分はすでに中国にいるのではないかという錯覚にすら陥ってくる。

アジアの通貨マップ



アフガニスタン
アフガニスタンの通貨は、アフガニー(Afghani=AF)。1米ドルが約50アフガニー。写真の紙幣は10,000アフガニー。

ビルマ(ミャンマー)
ビルマ(ミャンマー)の通貨は、チャット(Kyat)。流通している紙幣の種類は、1、5、10、15、20、45、50、90、100、200、500、1,000チャットの12種。

インド
インドの通貨はルピーで、表記はRe(複数になるとRs)。紙幣は10、20、50、100、500、1,000ルピー。6種類すべてマハトマ・ガンディの肖像画が印刷されている。写真の紙幣は10ルピー。

パングラデシュ
パングラデシュの通貨は、タカ(Taka)。紙幣は8種類(1、2、5、10、20、50、100、500タカ)ある。写真の紙幣は10タカ。

中国
中国の通貨は、元、角、分。1元=10角=100分。紙幣は、1元札、2元札、5元札、10元札、20元札、50元札、100元札、1角、2角、5角。肖像画は毛沢東。写真は20元札。

ラオス
ラオスの通貨はキップ(Kip)、キープとも呼ぶ。貨幣単位は、1、5、10、20、50、100、500、1,000、2,000、5,000、10,000、20,000、50,000キープ。国内経済がタイとの交易に依存していることもあり、タイバーツ、ならびに米ドルが日常的に流通している。

タイ
タイの通貨はバーツ。紙幣は10、20、50、100、500、1,000バーツの6種類ある。紙幣にはプミポン国王の肖像画が印刷されている。写真の紙幣は20バーツ。

ブルネイ
ブルネイ・ダルサラーム国の通貨。紙幣は1、5、10、25、50、100、500、1,000、10,000ブルネイドルがある。写真は1ブルネイドル紙幣。

カンボジア
カンボジアの通貨は、カンボジア・リエル(Riel)。100、200、500、1,000、2,000、5,000、1万、2万、5万、10万リエルの10種類。ただし米ドルや現金がないと旅行できない。写真の紙幣は100リエル。

インドネシア
インドネシアの通貨はルピア(Rupiah)。一般にRpと表記される。紙幣は100、500、1,000、5,000、10,000、20,000、50,000、100,000ルピアの8種類。写真の紙幣は1,000ルピア。

▲タイからラオスへは、メコン川を小船に乗って渡る

▲手前はタイ、青いゲートの向こうがビルマ

偽札で信頼は買えない

元NHKワシントン支局長の手嶋龍一による『ウルトラ・ダラー』という著書がある。

ダブリンで「ウルトラ・ダラー」と呼ばれる超精巧な偽100ドル札が発見された、製造元は北朝鮮、という設定から始まるドキュメンタリー・ノベルである。かなりの部分は事実だという。

この中で語られるのは、基軸通貨としてこれまで信頼を勝ち得てきたアメリカのドルが、偽札防止のためにいかに高度な技術を駆使した工夫を紙の中に盛り込んでいるかということ、そして北朝鮮が、そのアメリカの最高レベルの技術にどうにかして肉薄し、ウルトラ・ダラー開発への道を切り開いていく背景である。

自国の通貨を守ることは、結局自国の信頼を守ることである。そして、北朝鮮が本当にウルトラ・ダラーを作っているのであれば、それはすなわち、アメリカの信頼をそっくりそのまま頂戴してしまおうということだ。ウルトラ・ダラーができあがれば、アメリカの経済力の恩恵を受けることができるとともに、アメリカの築き上げてきた信頼自体をも失墜させることができるのだ。

しかし、ウルトラ・ダラーによって北朝鮮が世界から信頼を得ることは決してない。国の、すなわち通貨の信頼は、国が長年かけて築き上げることによってしか獲得することはできない。

そんな信頼を持ちうることができない新しい国は、信頼のある他国の通貨をとりあえず使うこともある。たとえば、東ティモールの通貨は米ドルだ。今のところ、1ドル未満のみは、東ティモール独自の「センタボ」(1センタボ=1米セント)も使っているが、少しずつ国が信頼を築き上げていくとともに、完全に独自の通貨を持てるようになるのかもしれない。

一枚一枚の紙幣には、その国がたどってきた軌跡の重みが秘められていると言えるのだ。

人民元を持ってラオスに戻る

さて、話はラオスと中国の国境に戻る。国境まで送ってくれた運転手に、まだ運賃は払えていない。

運転手を残して、国境の入国審査を待つ中国人の中に、大きな人民元札を両替してくれる人がいないか、探しに行った。だが、彼らには英語がほとんど通じず、また細かい人民元を持っていそうな人も見つからなかった。

どうしようもないので、国境の警備員に「どうしてもこの100元札を両替する必要がある、だからちょっとそこまで国境を越えさせてくれ」と身振り手振りで頼むと、こちらも驚いたことに、何も審査を経ないまま、あっさりと中国側に入れてくれた。

国境を越え、中国に入ると、何人もの男たちが寄ってきて、なにやら話しかけてくる。

言葉はわからないが、「とにかくおれの車に乗れ」と言っているようだった。早口でまくし立てる彼らの声に、いかにも中国らしさを感じながら、男の一人に金を両替してもらう。

そしてすぐに、警備員に礼を言って再び運転手の待つラオス側に走って戻った。

運転手は人民元を受け取ると、再び出国審査場へとトラックを走らせる。彼のポケットには、毛沢東とワシントンとラオ族の女性たちとが、穏やかな表情で、共存しあう。国境から遠ざかるにつれて、ラオ族の女性たちは、再び力を取り戻していく。

だが、自分のポケットの中にいた彼女たちは、この国境を越え、中国に入った瞬間に、ただの紙の上で静かに微笑む女性たちの絵にすぎなくなった。

Text by：コンドウユウキ

ラオス政府観光局
http://www.lao.jp/

在京タイ王国大使館
http://www.thaiembassy.jp/rte1/

ミャンマー大使館
http://www.myanmar-embassy-tokyo.net/

中華人民共和国駐日大使館
http://www.fmprc.gov.cn/ce/cejp/jpn/